札幌市教育文化会館情報誌「らく」 2015年2月発行

vol.36

# らく

sapporo
education and culture hall
news
raku

Noriyuki SAWA presents
OKHOTSK
SAPPORO
3.14 sat. 15 sun.

［インタビュー］

## OKHOTSK
## オホーツク－終わりの楽園－

# 沢 則行

## 沢さん、次はどんな人形劇をつくりますか？

札幌市教育文化会館

オホーツク―終わりの楽園―

［人形劇師］

# 沢 則行

チェコを拠点に世界を駆け回る人形劇師・沢 則行さん。
「オホーツク―終わりの楽園―」の2年ぶりの
再演に向けて意気込みをうかがいました。

沢さん

次はどんな
人形劇を
つくりますか？

Noriyuki SAWA

小樽市出身。北海道教育大学特別教科（美術・工芸）教員養成課程卒。1991年に渡仏。92年に文化庁在外研修生で、チェコへ。プラハを拠点に、世界各国で公演。また、チェコ国立芸術アカデミー演劇・人形劇学部、米国スタンフォード大学演劇学科、シカゴ大学、ロンドン人形劇学校など、多くの教育の現場で講座、ワークショップを指導した経験を持つ。国際的受賞多数。

一昨年の公演が終わった後に、もう一回やりたいって自分で言いだしたんです。僕自身はとてもわかりやすい芝居を作ったつもりなんですが、観た人にとって色々な解釈の幅があった様なので、もう少しその距離を縮められればと。「OKHOTSK」は今も謎が多いとされている「オホーツク文化」にインスピレーションを得て作ったオリジナルストーリーなんですが、和人、具体的には北方討伐の役目を負う阿倍比羅夫（あべのひらふ）とオホーツクの女長（おんなおさ）が出会い、戦によって愛が阻まれていく物語なんです。それを能舞台の上で、セリフなし、人形と役者、生演奏で物語っていくという手法を取りました。セリフがない理由は、ひとつにはオホーツク文化の言葉がいまだ解明されていないから。もうひとつは、セリフがないこと自体を課題にしたというか。日本で芝居を作るとしたら、たいていは先に脚本を作り、役者が読みあわせをして、最後に照明や衣装をつける、というのが多いと思うんです。でもこの作り方はたくさんある舞台の作り方の、たったひとつでしかない。僕が芝居作りを教わったチェコのクロフタという演出家は、脚本も決まっていない、役者も選び終わっていない、人形もできていないという状態で、照明の仕込みから始めるんですよ。照明家と演出家が1週間ぐらい劇場に入って、まず場面ごとに明かりを作っていくんです。最初はわけがわからなかったんですけど、この人達は、先に舞台の絵を作っていたんですね。その後なんですよ、脚本を書くのは。しかもこれは20年以上前の話ですからね。セリフがないことで色々な解釈が出るかもしれないですが、ないことによって生まれるものもあると思うんです。ひょっとしたら今後セリフが入るかもしれませんが、舞台は足し算と引き算。うまく調整をしながら作っていきたいですね。能舞台で人形劇をする、というのも教文ならではです。僕は明るい舞台が好きなんですが、能舞台は木のベージュ色が基調にあるので少し照明をつけるだけでいっぱい反射して、色もつけやすくなり、舞台が作りやすかったですね。生演奏も注目してもらいたいひとつです。オホーツク文化のどこか不思議なイメージを残したくて、できるだけ遠い時代の音楽を探しました。フランスのバロック音楽を中心に、チェロに良く似た（実際には系統が違うのですが）ヴィオラ・ダ・ガンバや笛やチェンバロで演奏しています。現代の楽器とは異なり、古い楽器には原始的な音の魅力があり、この舞台にぴったりだと思いました。

物語も人形も、音楽も舞台も、教文という環境だからこそ生まれてきたものです。2年前よりさらに進化した舞台にしますので、たくさんの方に観ていただきたいですね。

**オホーツク文化とは**

北海道の北部から東部・サハリン南部から南千島に、6世紀から10世紀にかけてオホーツク海沿岸を中心に栄えた北方文化。大正2年に網走モヨロ貝塚で発見された出土品の数々は弥生文化とも縄文文化とも異なり、海を狩猟の場としてトドやアザラシなどの大型動物を食料とする勇壮な民族だったことが発掘調査から想像されている。オホーツク文化は歴史のなかで姿を消してしまうが、その理由や原因は解明されておらず、いまだに謎の多い文化と言われている。

［フィギュアアート × 能舞台］　作／沢 則行

**OKHOTSK オホーツク―終わりの楽園―**

3月14日［土］①14:00 ②18:30
3月15日［日］14:00
札幌市教育文化会館 大ホール（能舞台）

出 演／沢 則行、さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座 ほか
料 金／全席自由 3,000円（㊀2,500円）
［チケット］
教文・大丸各プレイガイドにて発売中
ローソンチケット（Lコード：12160）・チケットぴあ（Pコード：440-326）

［あらすじ］
遠い昔、彼らは北の海を渡り、ようよう大きな島にたどり着いた。たくみに銛（もり）をあやつり、海獣を仕留める。森ではワインを醸造し、美しく自由な彫刻を削り出す：首の折れた女神、笑うクマ：そして仲間が死ぬとその身体を折り曲げ、なぜか頭に大きな壺を載せて葬った。島の海岸線で比類のない文明を築いた彼らは、やがてどこかへ忽然と姿を消し、楽園は唐突に終わりを告げる。：それから千五百年。残された滅びの骨がゆらゆら蘇ると き。「今」に迷うあなたに、もう一度明日の航路を示すために。

PHOTO:TOSHIE KUSAMOTO

# ダンス糸電話

Dance symposium 2015

平成26年度ダンスシンポジウム

［砂連尾 理ダンスワークショップ］
＋［レクチャーシンポジウム］

2015
**2/25［水］・26［木］**
**札幌市教育文化会館　研修室401**
参加費　3,000円（教文ホールメイト 2,500円）
（25日のみ：2,000円、26日のみ：1,000円）
※未就学児はご参加いただけません。

## ダンスを体験し、語り合う2日間

今年で5回目を迎える札幌市教育文化会館主催「ダンスシンポジウム」。経験・年齢・性別に関わらずだれもが気軽にダンスを楽しみ、踊る楽しさを地域で共有する「ダンスコミュニケーション」を軸としながら、平成22年からスタートしました。

今回は「ダンス糸電話」と題し、地域で市民が触れ合うダンスについて知り、体験し、話し合う場を2日間にわたってつくりだします。

ゲストは、山海塾制作の奥山緑さん。山海塾におけるダンスの取り組みについて講演していただきます。

さらに、国内外でも活躍し、高齢者や障がいをもつ人とのダンスづくりを続ける振付家・ダンサーの砂連尾理（じゃれおおさむ）さんによるワークショップも予定しています。

また1日目のプレゼンテーションには介護福祉士の野坂久美子さんも参加。高齢者施設の概要についても触れながら、ダンスコミュニケーションを広い視野で語り合います。

前年度よりさらに充実した内容の2日間。ダンスという枠を広げ、日常の中にもプラスアルファできる楽しみを探る、アクティブなシンポジウムです。

［振付家・ダンサー］

### 砂連尾　理
（ジャレオ　オサム）

1991年寺田みさことダンスユニットを結成。1993年〜1994年、ニューヨークにダンス留学。ホセ・リモンテクニークをAlan Danielsonに師事。
2002年、「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2002」にて、「次代を担う振付家賞（グランプリ）」「オーディエンス賞」をW受賞。受賞作「あしたはきっと晴れるでしょ」はジャカルタ、パリ、プラハ、ソウル、ニューヨーク、メルボルンでも上演する等、これまでに海外10ヶ国12都市で公演を行う。
2004年、京都市芸術文化特別奨励者。2008年〜2009年、文化庁・新進芸術家海外留学制度研修員（ドイツ・ベルリンに滞在。）
近年はソロ活動を中心に、ドイツの障がい者劇団ティクバとの日独共同制作「Thikwa+Junkan Project」（2009年〜2012年、ダンス・ドラマトゥルク：中島奈那子）、舞鶴の高齢者との「とつとつダンス part.1&2（2010〜）、音楽家・野村誠との「家から生まれたダンス」（2014年）の他、映像作家・細谷修平との共同制作による名取市閖上（ゆりあげ）の避難所生活者の声を集めたドキュメンタリー「閖上録」（2013年）、濱口竜介監督映画「不気味なものの肌に触れる」（2013年）への振付・出演等、ジャンルを横断する活動を展開している。また、2006年より合気道を始め、現在二段位。
立命館大学、神戸女学院大学、天理医療大学非常勤講師。

## ダンスシンポジウム・スケジュール

### 1日目　2015年2月25日［水］
18:30（受付18:00）

**講座1**
**ダンスの交流**
**〜「山海塾」の事例紹介**
18:30〜19:10
［基調講演］
講　師：奥山 緑（山海塾制作）

**講座2**
**高齢者施設の現場から**
**〜「グループホームみのり中の島」の活動**
19:20〜20:00
［基調講演］
発表者：野坂 久美子（グループホームみのり中の島）

**講座3**
**砂連尾 理ワークショップ**
20:10〜20:50
講　師：砂連尾 理（振付家・ダンサー）

**質疑応答**
20:50〜21:00

### 2日目　2015年2月26日［木］
18:30（受付18:00）

**講座4**
**コミュニティとダンス**
**〜アウトリーチの現場から**
18:30〜19:00
講　師：砂連尾 理（振付家・ダンサー）

**講座5**
**「コミュニティにおけるダンスの役割」**
**ディスカッション**
19:00〜20:30
パネラー：砂連尾　理（振付家・ダンサー）
奥山　　緑（山海塾制作）
櫻井　ヒロ
（ダンサー・ファシリテーター）
進　行：桑原 和彦（札幌市教育文化会館）

| | |
|---|---|
| 〈砂連尾 理アウトリーチ〉<br>グループホームみのり中の島 | 2015年2月26日［木］<br>14:00〜15:00 |

ダンスシンポジウム参加者で参加・見学希望の方はご相談ください。（先着順）



## PICK UP EVENTS

［教文主催事業ピックアップ］

昨年好評だった能楽師が指導する「お囃子体験講座」。能は「謡（うたい）」と「舞（まい）」で独特の物語を紡ぎだす、日本が誇る優れた伝統芸能です。
「お囃子（はやし）」は、囃子の音、掛け声などが渾然一体となって豊かな音色を奏でるシンプルで味わい深い演奏が大きな魅力です。
この講座で、伝統に根ざしたお囃子の魅力を実際に体験してみてください。

古典楽器に触れる貴重なチャンス!!
これでアナタも
お囃子プレイヤー!?

初歩から学んで楽しく体験！

### お囃子体験講座

能は650年以上も前に日本で生まれ、ユネスコ世界無形文化遺産にも認定された、世界に誇る舞台芸術です。能楽を身近に感じていただこうと、国立能楽堂と共催で、能楽堂の若手実演家による演奏の鑑賞や、笛、小鼓、大鼓、太鼓に触れる体験を通して能楽器の基本を学びながら、演奏の楽しさを味わえる体験講座を行います。楽器や演奏の仕方の説明は、初心者にも分かるような工夫を凝らしています。どうぞ気軽にご参加ください。

お囃子体験講座の様子
（国立能楽堂）

平成27年
**2月17日（火）18:30（20:30終了予定）**
**2月18日（水）14:30（16:30終了予定）**
※開場は開講の30分前

**札幌市教育文化会館 リハーサル室A ほか**
**定員：各日20名［先着順］**
※小学生は保護者同伴（有料）でお願いします。
※2日間参加できますが、内容は同じです。
各回とも4班に分かれて各々の楽器を学びます。

**受講料：2,500円** ※1回につき
（教文ホールメイト 2,000円）

講　師

| | | |
|---|---|---|
| 笛（森田流） | 栗林 | 祐輔 |
| 小鼓（幸　流） | 森 | 貴史 |
| 大鼓（高安流） | 高野 | 彰 |
| 太鼓（金春流） | 大川 | 典良 |

お申し込み・お問い合わせ
札幌市教育文化会館 事業課
TEL 011-271-5822

KYOBUN アート巡り 教文アートめぐり 3

**本郷 新**（1905-1980）
Hongou Shin

札幌市生まれ。戦後日本の具象彫刻を牽引した。高村光太郎に師事し、西洋近代彫刻の影響を受けながら、写実を基盤とした作品を作り続ける。大通公園等、現在も札幌市内で多くの彫刻を見ることができる。

**大ホール緞帳（どんちょう）**　［設置：1980年］

## 北の大地が生んだ彫刻家の原風景

縦10m、横20m。木の葉をわずかに残した白樺と、うっすらと積もった雪、そして色のほとんどない景色に見え隠れする、静かな半月。札幌市教育文化会館大ホールの緞帳に描き出されているみごとな白樺林は、札幌出身の彫刻家・本郷新の作によるものです。本郷は札幌・宮の森に生まれ、東京高等工芸学校で彫刻を学びます。近代彫刻の影響を受けながら、「彫刻は個人の応接間を飾るものではない。愛玩物でも装飾物でもなくもっと公共の広場で、社会的空間の中で生きるものこそ本当の彫刻のあり方でなければならない」という意志のもと、写実的でダイナミックな作品を生みだしました。そんな本郷の遺作となったのが本作です。幼少の頃遊んだ森を思い浮かべて描かれたといわれる白樺林の風景は写実性や力強さ以上に優しさあふれる作品となっており、作家の多面性をうかがわせる貴重な一作と言えるのではないでしょうか。

彦素由幸（札幌ハムプロジェクト）から指名→

# さっぽろ演劇人

No.003

## 光燿 萌希（こうか もえぎ）

思い立ったら、行動したくなっちゃう。壁に当たりながら、前に進んでいくんです。

**光燿萌希 プロフィール**

1983年 札幌生まれ。パフォーマンスプロダクション「COLORE」代表。2004年に「ミュージカルユニット もえぎ色」を立ち上げる。企画から演出、出演まで幅広く行う。

SAPPORO ENGEKIJIN

KOUKA MOEGI

昨年10周年を迎えた札幌発の「ミュージカルユニット もえぎ色」を主催する、光燿（こうか）萌希さん。現在、一児の母として、演劇人として過ごす光燿さんにお話を伺いました。

――ミュージカルを始めよう、と思ったのは？

「もともとダンスをやっていたのですが、この身長でプロは無理なんじゃないかと親に反対されて（笑）。でも高校最後の学校祭でダンスを自分で演出して踊ったら、やっぱり楽しくて。それでダンス以外の舞台で踊れるもの、ということでミュージカルをやりたいなって。そこから進路をそちらの方に変えて、最終的に当時の大谷短大の音楽科に入りました。ミュージカルをやりたい！と思っていたので生徒会長になって（笑）、美術科や保育科の人たちに声をかけて舞台を作り、音楽科のみんなには演奏してもらい、ミュージカルを上演したんです。2年目は作・演出・作詞・作曲・出演まで自分でしてしまいました」

目まぐるしい展開。その後、ミュージカルユニットを立ち上げ、ほかにも歌や踊りでパフォーマンスを繰り広げる「もえぎ色女学院」や、若手が中心となってすすきの地区の活性化を目指す「すすきの盛り上げ隊！」で初代リーダーを務めるなど、幅広くパワフルな活動を続けています。

――約10年活動して、今思っていることは。

「10年たって、一度原点に返ろうと思っているんです。たくさんのことをやってみて、本当に自分がやりたいこと、続けたいことは何なのだろうと。そうしたらやっぱりミュージカルがやりたい、表現者でありたいんだなって。脚本は脚本家にお願いして、その分演出に集中するなど、どんどんそぎ落として、表現を磨いていくことにしたんです。そうすればファンも自然に生まれるんじゃないかと思うんです」

――これから目指したいことは？

「札幌にはないミュージカルを作りたい、という想いがずっとあります。特に、今作りたいのは、親子で楽しめるミュージカル。子ども向けの舞台に親がついていくのではなく、親も子どももそれぞれ面白いと思える舞台にしたいですね。そういう作品を、札幌から世界に発信！また大きなことを言っていますが（笑）、まずはやってみなくちゃって思うんです」

［撮影場所］ミュージカルユニット もえぎ色の稽古場、「あけぼのアート&コミュニティセンター」

◎次回出演情報：劇団「yhs」／教文演劇フェスティバル2013 短編演劇祭優勝記念公演「テッペンパレード」 脚本・脚色・構成・演出：南参

日程：3/19（木）・3/20（金）　会場：札幌市教育文化会館 小ホール ※光燿さんの出演は20日のみ